心因加重性が疑われた若年者腰痛の症例

鹿児島大学整形外科（主任：酒匂 崇教授）

吉 國 長 利・酒 匂 崇
富 村 吉十郎・清 水 恒 光
久保田 龍太郎・本 重 壮史郎
松 永 俊 二・岸 本 浩
中 村 宏 志

Psychosomatic Low Back pain in the Young

by

N. Yoshikuni, T. Sakou, K. Tomimura, T. Shimizu,
R. Kubota, S. Motoshige, S. Matsunaga,
H. Kishimoto and H. Nakamura

Department of Orthopaedic Surgery Faculty of Medicine, Kagoshima
University, Kagoshima. (Director: Prof. Takashi Sakou, M. D.)

It is important to differentiate emotional responses from the organic disorders in treating the patients of low back pain. Especially in indicating surgery, little attention has been paid to psychogenic low back pain in the children. We report four young patients who showed remarkable manifestations of sciatica. We revealed that emotional factors or psychogenic manifestations of symptoms with lumbar disc herniation were involved in these patients after surgery or careful observations and examinations.

はじめに

若年者の腰痛は種々の原因が考えられるが、その頻度は成人に比し少なく、しかも心因性要因の介入が原因と考えられる腰痛は、きわめて稀であり、これらの症例についての報告はあまり見当らない様である。我々はこの様な4症例を経験し、その内2症例に手術を行ったが、これらの症例について検討及び反省を加え報告する。

症 例

症例は16才女子3例と17才男子1例である（表1）。症例を供覧する。
症例1. 17才男子
主訴：腰痛，歩行障害
既往歴：昭和54年4月虫垂切除術を受けた。
現病歴：昭和53年10月，運動会にて腰痛が出現し

表1 症 例

症例	年齢	性別	既 往 歴	治 療
1	17歳	男	虫垂切除術，過敏性大腸炎，脾臓炎	保存的
2	16歳	女	虫 垂 切 除 術	Love法
3	16歳	女	胆嚢炎，虫垂切除術	Love法
4	16歳	女	虫垂切除術，扁桃腺摘出術，腎炎	保存的

たが放置していた。昭和55年4月，高校入学後に腰痛が増強し，同時に頭痛，腹痛が出現し，某医にて過敏性大腸炎の診断を受け，以後休学した。昭和56年1月，腰痛が増強し，某整形外科にて保存的治療を受けたが，症状の軽快はみないままに，昭和56年4月，復学したが腰痛は更に増強し，歩行困難となった為，同年12月，当科へ入院した。

入院時所見：脊柱の可動制限は著明で、脊柱に叩打痛、圧痛があり、傍脊柱筋の緊張は強く圧痛を認めた。ラセグ徴候は両側 30° で陽性、膝蓋腱反射、アキレス腱反射は両側とも軽度亢進していたが、バビンスキー反射は陰性で、膀胱直腸障害も認められなかった。知覚障害は第12胸髄節以下の知覚鈍麻を認めたが、日時により著明に変動した(図1)。ミエログラムでは L_5 神経根に Perineural cyst が認められる以外、特に異常所見は認められなかった(図2)。

入院後経過：図1に示した如く、知覚障害のレベル

図1 知覚障害の推移(症例1.17才, 男子)

図2 症例1の myelogram perineural cyst を認める。

は日時により著明に変動し、歩行障害は医師の見ている場合と、そこでない場合とでは、その程度にかなりの差を認めた。その内に四肢痙攣発作が出現する様になった為、心療内科を受診した。心理テストでは CMI は第1領域にあったが、心療内科医との consultation において虚言と自己防衛の態度が強く、臨床面において神経症尺度が高いと判断され、心療内科に転科の上、心身医学的治療を行った。その結果、腰痛、歩行障害は消失し、現在は健康な高校生活を送っている。

症例2. 16才女子

主訴：腰痛

既往歴：昭和55年10月虫垂切除術を受けた。

現病歴：昭和56年9月、誘因なく腰痛が出現し、同年11月14日、某整形外科受診し、根性坐骨神経痛の診断で保存的治療を行うも、症状は軽快せず、同年11月20日、起床時に腰部激痛が出現して起床不能となり、某整形外科へ入院した。持続硬膜外ブロック等の保存的治療を受けるも、腰痛は軽快せず、昭和57年1月19日、当科へ入院した。

入院時所見：脊柱は可動制限が著明で、叩打痛、圧痛を認め、傍脊柱筋に圧痛があった。ラセグ徴候は右 60° 、左 80° で陽性で、膝蓋腱反射、アキレス腱反射は正常で、バビンスキー反射は陰性であった。知覚障害は右下腿外側より足部に知覚鈍麻を認め、図1の如く日時により変動した。

ミエログラム所見： L_5 神経根、 S_1 神経根の根嚢像の陰影欠損を認めた。

デスログラム所見：椎間板像は正常と思われたが、 L_4/L_5 、 L_5/S_1 間に造影剤注入時に腰部から右下肢への著明な反応性疼痛が出現した。疼痛は L_5/S_1 間への注入時に特に著明であった。

昭和57年2月23日、Love法(L_5/S_1 間)を施行した。術中、右側 S_1 神経根が軽度膨隆した椎間板に圧排されている所見を認めた。術後、症状は一時的に軽快したが、3週目頃より再び同様の症状を訴えた為、部位診断目的にて L_5 神経根ブロックを行なった。その結果、ラセグ徴候は殆ど消失し、腰痛も著明に軽快減したため、同年6月3日、 L_4/L_5 間のLove法を施行した。しかし、症状の軽快は得られなかった。心因性要因の介入も考えられた為、録療内科を受診、CMI は第1領域にあったがパラノイアの尺度が高く、ヒステリー反応もみられた為、心身医学的

治療を行なった。その結果、ラセーグ徴候は右 60° 陽性、左陰性となり、腰椎の運動制限も著明に軽減、歩行、運動にも困難を感じなくなった。

症例 3、4 とともに 16 才女子であるが、上記 2 症例と同様に腰痛、下肢痛、知覚障害を強く訴えた症例であり、症例 3 は、ラセーグ徴候は右 70° 陽性、左 80° 陽性で、ミエログラムにて椎間板ヘルニアの所見があり、Love 法を行なったが軽快しなかった。症例 4 はラセーグ徴候は陰性であり、ミエログラムでも特に異常は認めなかった。2 症例とも心身医学的治療により初めて症状の著しい軽快を得た。

総括及び結び

成人の腰痛に心因の介入例の多い事は指摘されているが、若年者に関しての報告は見当たらない様であり、関心が殆ど払われていないと考えられる。この理由としては、若年者の腰痛は成人に比し頻度的に少なく、小児では金銭的帰望とは無関係な事などが挙げられる。しかし、近年社会の複雑化に伴い、進学の問題、友達関係のトラブル等により心因介入例少なからず存在するものと考えられる。

著者らがここに報告した 4 症例は根性坐骨神経痛と極めて類似した症状を呈し、綿密な観察により、或いは椎間板ヘルニア摘出術の手術後症状の改善が無く再検討の結果、心因の介入が明らかとなった症例である。手術した 2 症例は、ラセーグ徴候著明で、ミエログラムにても根嚢像の欠損があり、デスコグラムにて 1 例は疼痛の再現が見られているので、心因の over-ay した可能性もある。4 症例とも保存的治療や観血的治療に全く反応せず、愁訴が多彩であり、知覚障害のレベルが日時により著明に変動したという特徴をもっていた。また 4 症例とも表 1 に示すように腹部疾患の既往を有しており、これら腹痛を主訴とする疾患と

心身症との関連性が疑われた。心因の関与を見出す事は特に手術を行う場合に重要であり、詳細な現病歴の聴取、臨床所見、経過、患者の置かれた背景等に充分な注意が払われるべきである。心理テストは 1 例のみが CMI 第 3 領域で、他の 3 例は正常領域にあり、補助診断には余り役に立たず、心因介入の疑いがあれば精神科と心療内科に相談することが肝要である。

(心身医学的立場より種々のご助言をいただいた鹿児島大学医学部鑑一内科野添新一講師に深謝いたします)

文 献

- 1) 林浩一郎：整形外科に必要な心理テスト。整形外科，25：689-693，1974.
- 2) 蕪木初枝，柴崎啓一，大谷 清：腰痛としての心身症。整形・災害外科，24：1477-1481，1981.
- 3) 丸田俊彦：慢性疼痛と精神医学。心身医学，21：393-398，1981.
- 4) 遠山尚孝：心身症における治療抵抗(Ⅲ)。精身医。12：322-，1972.
- 5) 山口義臣，山本希雄：腰痛症の疫学，整形外科 Mook，11：9-19，1979.

質 問

4 症例とも虫垂炎などの消化器症状が多いようですが、これらと心因性の介入と何か関係があるのでしょうか。

解 答

既往歴に、消化器疾患が多いというのは、irritable colon cyndrone といわれるように、これらの患者は、過去に何んらかの腹部症状を訴えているのが多いような因象を受けた。